

聖書箇所：ルカの福音書9章37～45節

説教題：渡されるイエス

1 父と子

(1) 「ひとり息子です」

今日の箇所は、ある父親が悪霊につかれた自分の息子をイエスのもとに連れて来る場面で始まります。イエスにとっては、いつものことであつたはずですが、しかし、ルカはなぜわざわざこのことを特別のこととして記しているようなのです。

なぜイエスにとって特別なことなのか。その鍵となることばが38節の父親のことばにあります。「先生、お願いします。息子を見てやって下さい。ひとり息子です。」父親はそこで終わらせしないで、こう付け加えます。「ひとり息子です。」もっと詳しく訳せば、こうなります。「この子は私にとってたったひとりの息子なのです。」

(2) イエスの心

イエスがこの父親のことばを聞いたとき、大きく心を動かされていきます。自分は、父なる神のもとから遣わされてきたひとり子。そのひとり子が、これから十字架に向かおうとしている。苦しみを味わおうとしている。そのことで父なる神がどんなに心配しておられるか、イエスはいつも考えておりました。イエスにとって、この父親のことは他人事には思えません。息子のことを何とか助けてもらいたいと願うその哀れな姿と、父なる神のことが重なって見えていきます。

父なる方も子なる方もどちらも神なのだから、いつも冷静で心を動かされることはな

い。そんなふうに思っていたでしょうか。決してそんなことはありません。神は私たちが造られました。その私たちに、親であれば子どものことを心配する心を与えてくださったのは神です。なぜそのような心を与えたのですか。神ご自身がそのような方だからです。

この父親の姿をとおし、私たちは父なる神がひとり子イエスのことをどれほどに心配しておられたのか、苦しんでおられたのか、具体的に知らされていくのです。

2 「ああ、不信仰な、曲がった今の世だ。」

(1) だれに向けて？

さて、みなさんは41節のことばをどのように読んででしょうか。「ああ、不信仰な、曲がった今の世だ。いつまで、あなたがたといつしよにいて、あなたがたにがまんしていなければならないのでしょうか。」

なんだか、このことばが読んでいる自分に向けて語られているように感じて、心が刺される思いをした方もいるかもしれません。安心していただきたい。そうではありません。ではいったいだれに対してこのようなことばを語っているのでしょうか。イエスの目の前には父親がいますから、父親のことか。でも、それでは辻褄が合いません。この父親は、イエスなら息子のことを助けてくれるに違いないと信じてやってきました。そういう意味では信仰はありました。父親ではないとするなら、残るのは弟子たち。まさに弟子たちの不信仰ことをイエスは嘆いていおられます。

(2) 弟子たちにはなぜできなかったのか
なぜ弟子たちのことを不信仰だと言われたのでしょうか。鍵は40節です。「お弟子たちに、この霊を追いだしてくださるようお願いしたのですが、お弟子たちにはできませんでした。」

少し時間を逆戻りして、9章1節を開いてみましょう。そこにはこう書かれています。「イエスは、十二人を呼び集めて、彼らに、すべての悪霊を追いだし、病気を直すための、力と権威とをお授けになった。」

弟子たちはこのとき悪霊を追い出す力と権威をイエスからいただきました。そして実際に弟子たちは町や村に遣わされたとき、この力と権威を用いて悪霊を追いだしていました。その出来事は、ときのイスラエルの王であったヘロデの耳にまで届くほど、大きな反響を巻き起こします。

「すべての悪霊を追い出す力と権威」とありますから、例外はありません。父親が連れて来た子どもの悪霊も、本当は追い出すことができたはず。ところが失敗してしまった。なぜできなくなったのか。イエスは、弟子たちの信仰に大きな問題があると指摘しました。どんな問題でしょうか。

ペテロは、少し前のところでイエスにこう告白していました。「あなたは神のキリストです。」一見、りっぱな信仰のように見えます。ところが額面どおりには受け取ることができません。ペテロを初めとする弟子たちは、「救い主キリスト」のことを勝手に解釈していたのです。この方は、ローマ軍を追いだし、イスラエルを神が約束されたすばらしい国に立て直してくれるに違いない。その暁には、当然自分たちはイエスの側近となり、政治家

としてエリートコースを歩んでいく。それが彼らの夢でした。バラ色の未来でした。

最初からそんな野望を持っていたのではありません。イエスから「わたしの弟子になりなさい」と声をかけられたときは、単純で素朴な信仰だったと思うのです。でも、イエスから悪霊を追い出す力と権威をゆだねられたとき、彼らはじょじょに変わっていきました。この力と権威さえあれば、自分たちは国をひっくり返すことができる。そのようにして弟子たちは自分の力により頼むようになります。そんなふうにして傲慢になっていき、最初の素朴な信仰は失ってしまいました。その結果、悪霊を追い出すことができなくなっていったのでした。

(3) 予想できなかったことなのか？

そんな弟子たちのことを知って、イエスはまるで思いがけないことが起きたかのように、「ああ、不信仰な、曲がった今の世だ」と嘆きます。でもよく考えてみるとイエスは神です。神である方はこの先何が起きるのか、すべてご存じではないですか。弟子たちがやがて信仰を失い、悪霊を追い出すことができなくなる。そのことはあらかじめ予想されたことのはずではないですか。それなのに、どうして、今初めて聞かされたかのように驚き、嘆くのでしょうか。まるで私には、イエスはここで演技をしているように思えてなりません。

もちろん悪ふざけしているわけではありません。嘆いているように見えながら、実に重い内容のことを語っている。「いつまで、あなたがたといっしょにいて、あなたがたにがまんしていなければならないのでしょうか。」いたい、いつまでですか？良く考えてくださ

い。十字架までです。では、イエスにとって、十字架に行くことと、弟子たちのことをがまんするのといたいどちらが大変ですか。比較にもならない。十字架に向かうことほど難しいことはない。

そうするとどうなりますか。弟子たちのことをがまんするのはもういやだと言っているように聞こえたけれど、実はそうではない。言いたいことは正反対です。十字架に向かうことはつらいけれども、でも先延ばしすることは絶対にできない。不信仰な弟子たちのためにも、一刻も早く十字架に向かわなければならぬ。そのような決意を表すことばだったのです。

3 「人々の手に渡されます」

(1) 向き合いたくない弟子たち

イエスは汚れた霊をしっかりとつけ、この子どもをいやし、父親に戻されました。人々はこれを見て驚き、イエスに対する人気が高まっています。弟子たちはこれを見て、イエスは自分たちの夢をかなえてくださる、そのような確信をますます深めます。そんなとき、イエスは弟子たちにこう言われます。「このことばを、しっかりと耳に入れておきなさい。人の子は、いまに人々の手に渡されます。」

45 節に、弟子たちがこのみことばを理解できなかったとあります。なぜ理解できないのでしょうか。弟子たちが見ているのはバラ色の未来です。でもイエスが言われることは、どうしても真っ暗な絶望の未来にしか見えません。明るい未来なら理解することは簡単。でも、暗いこといやなことは理解したくない。別のことばで言えば向き合いたくない。これが罪ある人間の姿です。

父なる神は山の上で雲の中から言われま

した。「彼の言うことを聞きなさい。」イエスも言われました。「このことばを、しっかりと耳に入れておきなさい。」それでも聞きたくない。それでも理解したくない。

(2) 十字架に向き合う歩み

まったく今の時代の生き方そのものです。不都合なことがあっても、寝た子を起こさなければ万事うまくいって、みなが幸せになれる。そう信じ込もうとします。それが弟子たちのしたことです。

しかし、イエスはそれでも忍耐強く訴えます。「このことばを、しっかりと耳に入れておきなさい。人の子は、いまに人々の手に渡されます。」「裏切られます。」

暗いところを見ろ。おまえたちには絶望しかないと言いたいではありません。私たちはどんなに幸せを追い求めたとしても、仮にこの世の富と名声と榮譽を受けたとしても、いつかは死ぬのです。いったい何が残りますか。何も残らない。パラ色の未来と思って信じていたこと。じつは、砂の上に建てた家と同じ。嵐が来ればすべて崩れ、大水が来ればすべてが流されて何も残らない。

だからイエスは言うのです。「人の子はいまに人々の手に渡されます。」何も希望が見えないようなイエスの十字架です。しかし裏切られ、見捨てられ、すべてを失ったかのように見えても、実はそこには本当のいのちがある。だから向き合いなさいと勧めます。

もちろん、十字架に向き合うことは簡単なことではありません。野郎としてできる事ではない。しかし、主はまるで先を争うようにして、もっともつらい十字架に向かおうとされました。父なる神がどれほどご自分のことを心配し、苦しんでおられるか知っておられ

ます。それでも、不信仰な私たちのために、
十字架に向かわれます。

イエスが先に歩んでくださいます。私たち
も、主に励まされつつ十字架に向き合う歩み
にでありたいと願わされます。